

秋元氏時代城絵図にみる肴町向櫓（郷土館蔵）

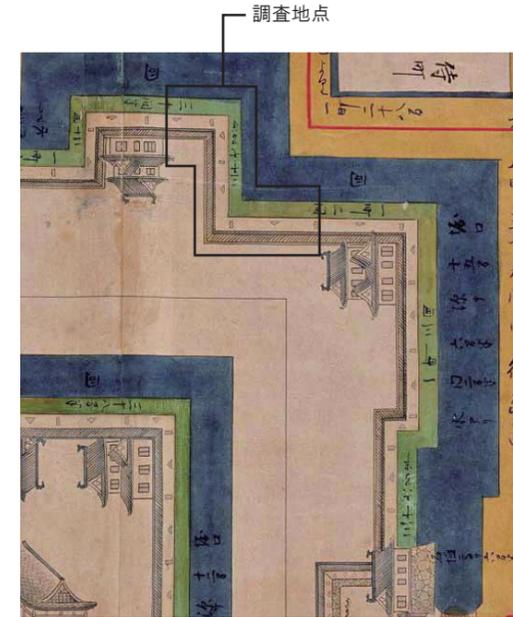
1 肴町向櫓石垣（さかなまちむかいはぐらいしがき）

肴町向櫓の櫓台となる石垣が検出されました。ここには、江戸時代の城絵図によると、二層の櫓がそびえていました。検出された石垣の規模は、東西約8.5m、南北約6.5mで、南側に雁木（がんどぎ）と呼ばれる階段が設置されていました。

石垣の築造年代は、土塁の形成が元和8年（1622）に最上氏が改易され鳥居氏が入部した際の改修によるものなので、それと同時期であると考えられます。

石垣の高さは、約2mあったことがわかりました。ただし、時代を経るごとに石垣を埋めるように周囲が整地され、幕末には地表面からの高さは40cm程度になっていました。

現地表面から約40cm下から、軒丸瓦と軒平瓦がまとまって出土しました。軒丸瓦の文様に堀田氏の家紋である豎木瓜文が使用されているので、堀田氏の時代の瓦であるとわかります。軒丸瓦の文様部が外されていたり、はがされているので、堀田氏の次に山形城に入った大名により屋根から降ろされた瓦であると考えられます。



江戸時代前期の土塀（正保城絵図より）

屏風折れ（外折れ）

屏風折れ（内折れ）

屏風折れ（外折れ）

屏風折れ（内折れ）

石列（新） 石列（古）

2 屏風折れ土塀（びょうぶおれどべい）の礎石

屏風折れ土塀とは、所々鋭角な折れ曲がりをもつ土塀のことです。土塀には穴が開いており、ここから攻めてきた敵に対して身を隠しながら弓や鉄砲で攻撃します。通常の直線的な土塀では正面は見やすいですが、左右が死角となり敵を狙うことができません。その欠点を解消したのが、屏風折れ土塀です。折れ曲がる部分からは、左右に対しても敵を攻撃することが可能となります。

しかも、屏風折れ土塀の礎石は2時期あることが確認されました。新しい時期は城の外側（堀側）に折れ曲がる外折れ式で、古い時期は城の内側（二ノ丸側）に折れ曲がる内折れ式の構造でした。古い時期の土塀が倒壊したため、新しく新築したことが伺えます。

山形城の城絵図には土塁上に土塀が描かれていますが、屏風折れが所在したような描画が確認できるものはありません。今回検出された屏風折れ土塀が、いつの時期に何の目的で築いたのか、今の段階では不明です。

他の城郭では、城絵図に屏風折れ土塀の記載があるものは存在しますが、遺構として現存している事例は存在していません。今回、山形城で検出された屏風折れ土塀は、全国的に見ても非常に貴重な遺構です。